

米戦時情報局 (OWI) の『延安報告』

“Yenan Reports” by the Office of War Information (OWI), USA.

山 極 晃

Akira Yamagiwa

はじめに

本稿で取り上げるのは、第2次大戦中の1944年9月から翌45年4月にかけて、重慶に事務所を持つ戦時情報局 (Office of War Information - 以下 OWI と略記する) の中国部長フィッシャー (F. McCracken Fisher) がファイルした『延安報告』 (“Yenan Reports”) シリーズである。報告は70通に及び¹⁾、その筆者にはフィッシャーの他に、エマーソン (John K. Emmerson)、アリヨシ (Koji Ariyoshi, 有吉幸治)、シュースドルフ (Adolph Suehsdorf) らがいる。彼らは OWI 員もしくはその関係者であり、当時対日心理作戦に従事しており、延安を中心に八路軍によって展開されていた心理作戦の実態を調査した。その報告は対日心理作戦の多岐にわたる諸問題を扱っている。彼らは八路軍の心理作戦が予想以上に進んでおり、成果を挙げていることを高く評価した。なかでも対日心理作戦工作の殆どが元日本軍捕虜 (および投降者) たちに任されて、彼らが自主的に工作を展開しているのに感嘆した。

当時の日本軍では、捕虜になることは極めて不名誉であり、一家の恥とされた。日本軍部は「生きて虜囚の辱を受けず」(戦陣訓) という教育を徹底しておこなった。そのため捕虜になる者は少なく、捕虜になると自殺を謀ろうとした。捕虜として生き延びても、アメリカ軍と協力する人は少なかった。ところが八路軍支配地域では、日本軍の捕虜は非常に多く、しかもその後日本軍に対する心理作戦に従事する人達も少なくなかった²⁾。

OWIの要員たちは八路軍地域での心理作戦の活動の実態とともに、「大和魂」に凝り固まった元日本軍兵士たちがどうして、いかに変身を遂げたのかを知ろうと努めた。そして彼らの進んだ心理作戦工作から真剣に学ぼうとした。また各地のアメリカ軍の対日ピラを持ち込んで、元日本兵捕虜たちの批判を仰いだ。勝者 (米軍) が敗者 (日本軍捕虜) から真剣に学んだのである。

八路軍および元捕虜の側でも積極的にそれに応えようと努めた。しかし元捕虜たちの中には、「階級的立場」が違うアメリカ軍に捕虜教育はできまいという冷笑的な態度も存在した³⁾。また OWI 員たちの「共産主義」に対する対応はナイーブすぎるという批判もあった。とくに戦後、マッカーシー旋風の時代には、中国共産党と接触した経験を持つだけで「疑惑」と「非難」の対象とされた。しかし彼らをあのように引きつけ、感銘を与えたのはなぜなのか。まず彼らの報告に即してその実態にふれてみたい。それは第2次大戦の性格とその時代を考える上で、一つの視点を提供しているように思われる。

また外交官であったエマーソンは、日本軍隊に対する心理作戦とともに、アメリカ軍が日本本土に上陸した時、いかに日本人の抵抗を弱めるか、さらに戦後いかに日本人の協力を得るかという観点からも、熱心に問題を考察し、国務省に対して提案を行った。

本稿は、最初エマーソンの提案とその処理をめぐる経緯をも取り上げる予定であったが、『延安報告』そのものの考察だけで予定の紙数を越えてしまったので、彼の最初の構想と提案を紹介するにとどめ、この問題は稿を新たにして論ずることにしたい。

I フィッシャーの延安報告

(1) OWIの延安での活動のはじまり

1944年7月、中国国民政府の承認のもとに、アメリカ軍事視察団（U. S. Army Observer Group in Yenan）が初めて中国共産党地区に派遣された。団長はバレット（David D. Barrett）大佐で、一行の中には外交官でスティルウェル（Joseph W. Stilwell）司令部付であるジョン・サーヴィス（John S. Service）も含まれていた。視察団一行は8月12日、日本人民解放連盟の歓迎会に招かれた。席上連盟代表岡野進（野坂参三）が演説を行った。

彼は「日本人民解放連盟と日本労農学校および日本の反ファシスト地下組織の名において、」アメリカ軍事視察団と新聞記者たちを心から歓迎すると述べた。そして日本共産党など、日本の反ファシスト勢力の状況を説明した後、こう語った。これらの「勢力の弱点は団結の不足にある。彼らを団結させることが日本人民の当面する緊急の任務である。この任務を実行するために、我々は今年延安で『日本人民解放連盟準備委員会』という組織を作った。その目的は国内外のすべての民主的日本人と組織を団結させることである。その主な綱領は、①戦争の即時停止、②軍部独裁の打倒、③新しい平和的、民主的共和制の日本の建設である⁴⁾。これはカイロ会談の決定に述べられている連合国の戦争目的に沿っている。」我々はこの委員会の下に、すでに華北、華中に二つの地方協議会と様々な地域に17支部を持っている。日本内地への浸透にも努めている。我々は重慶の日本人との連携を確立している。またアメリカ、インドの反ファシスト日本人と接触したいと願っている。

日本の民主勢力は連合国と団結し、その支持を得なければならない。我々は八路軍と新四軍とは密接に協力してきた。しかし連合国の主力との接触を確立できていない。延安にあなた方が来られたことが、連合国の政府と国民との最初の接触・交流の素晴らしい機会となるよう真剣に望んでいる。

このような接触が樹立されるならば、敵の敗北という共通の目的のためにも、戦後の平和的民主的日本人を保障する上でも有益であろう⁵⁾。

サーヴィスは8月16日の報告でこの岡野の演説を詳しく紹介しているが、その前文で次のように述べている。岡野氏と解放連盟の活動の潜在的な有用性については十分な報告をすることも、意見を述べる用意もまだない、しかし近い将来そうできるよう望んでいる。

そしてこの報告のコピーを、重慶の大使館の他、重慶の戦時情報局のフィッシャー、ニューデリーの中国・ビルマ・インド戦区司令部〔スティルウェル司令部〕（デーヴィス（John P. Davies）の情報用に）にも送るよう指定している⁶⁾。

サーヴィスの報告に接した後、九月初めにフィッシャー OWI 中国部長が延安を訪問し、ここから OWI の延安における活動が始まる。フィッシャーは学生時代に中国に旅行し、そのまま中国に留まって燕京大学を卒業、大戦前は UP 通信の通信員として働いた。中国語と日本語に堪能だったという⁷⁾。

彼の延安での目的は、八路軍の心理作戦（psychological warfare）工作を調査し、①彼らの経験と方法からアメリカの心理作戦にとって、何を学ぶことができるかを決めること、②日本軍と日

本国内の諸条件についての情報源とチャンネルを確立することであった⁸⁾。二週間の滞在中、フィッシャーは李初梨敵軍工作部副主任、岡野進、羅瑞卿野戦政治部主任らから八路軍および解放連盟の捕虜政策と日本軍に対する心理作戦の歴史と現状について詳しい説明を受けた。また解放連盟と日本労農学校の元捕虜たちと接触し、彼らの活動を調査、見聞した。ここではまず八路軍の心理作戦の歴史と現状についての報告を紹介することにしたい。しかしこれは相当長いものなので、大雑把に要点のみを略述する。

(2) 八路軍の対日心理作戦の発展⁹⁾

まず、「八路軍」という言葉は、一般的に使われている、中国共産党に指導されている軍隊という広い意味で使うとしている。八路軍の心理作戦の責任者たちは数日を費やして彼らの組織、路線と政策の発展、方法、失敗、日本に関する情報について説明してくれた。彼らは十分かつ完全な情報を進んで提供したいと望んでいるように見えた。

「共産党の指導する軍隊の基本的特徴の一つはその政治的性質で」あり、全兵士の政治教育と教化が最初から重視されてきた。

軍の政治教育を担当しているのが政治部であり、その中に敵に対する心理作戦を任務とする敵軍工作部(略称、敵工部)があり、軍の各級単位に応じてそれぞれの組織を設けている。

八路軍の心理作戦は内戦期に始まり、大いに成果を挙げた。37年に日中戦争が始まると、最初同じ路線に従ったが、成功しなかった。日本軍は捕虜を不名誉とする教育に凝り固まっていたし、他方捕虜になれば拷問を受け、殺されると思い込んでいた。また日本語による宣伝ができなかったこともかなり影響した。さらに「日本の革命を実行せよ」、「天皇を打倒せよ」などの左傾路線の行き過ぎもあり、日本兵の不信と敵対を招いた。

38年11月、中共6期拡大6中全会で、侵略戦争に対する中国、日本、朝鮮、台湾の人民の統一戦線を樹立し、日本ファシスト軍国主義者に対する共通の闘争を実行する路線が確立された。これは中国軍民が国土を踏みにじった日本軍民に思いやりをもつべきだという概念を打ち立てた。この線に沿った教育が兵士と農民たちの間に行われた。また日本兵をこの戦争観で説得しようとした。しかし成功しなかった。試行錯誤を経て、[40年7月]朱徳総司令官、彭徳懐副総司令官の日本軍捕虜の優待に関する「命令」が公布された。これはその後の日本軍捕虜の扱いについての基本的政策となるものであった。

「日本兵士は勤労大衆の息子たちであり、兄弟たちである。日本の軍閥と財閥に騙され、強制されて、やむを得ず我が軍と戦ってきた。それゆえに：

1. 捕虜となった日本兵士を傷つけたり、辱めたりすること(下線はフィッシャーによる)は厳しく禁止される。彼らの持ち物を没収したり、壊したりすることは許されない。(そして彼らを兄弟として扱わねばならない。)この命令に従わない我が軍の将校・兵は罰せられる。
2. 負傷または病気の日本人捕虜には特別の注意をはらい、適切な治療が与えられる。
3. 帰国、あるいは原隊に戻ることを欲する日本兵士には、安全に目的地に到着できるよう最大限の便宜が供与される。
4. 中国に留まって、中国軍のために働きたいと希望する日本人捕虜には適当な仕事を与えられる。学習を希望する人々には適当な学校に入れるよう援助する。
5. 家族や友人に連絡を取りたいと願う日本人捕虜には便宜が与えられる。
6. 戦死した日本兵士は埋葬され、適当な墓石が建てられる。¹⁰⁾

この命令は公布されただけでなく、積極的に八路軍の全単位に伝えられ、教え込まれた。兵士たちは積極的に農民や人民に教え込んだ。フィッシャーは言う。「兵士と人民がこれらの原則を実行したことは殆ど疑いない。私は多くの日本人捕虜と話した。彼らはみな捕らえられた時の扱いに様に驚いていた。八路軍地域を85日歩いて延安に到着したアメリカ戦闘機パイロットもこのことを確証した。彼は日本軍捕虜をどうしてこう親切に扱うのか理解できない、と言った。」

「このような捕虜の扱いの背後にある考えは、何よりも日本兵の敵対感情を崩壊させ、八路軍は捕虜を優遇し、一般の兵士を敵としてではなく、誤導され、強制された友人、隣人と見なしていることを判らせることにある。」

戦闘を重ねるにつれ、捕虜の数は増え、捕虜の教育が進むなかで、八路軍の心理作戦工作に参加を希望する日本人が増えていった。39年に彼らによって覚醒連盟 [初めは「めざまし連盟」と称した] が結成された。これは間もなく鹿地亘が重慶に設立した日本人反戦同盟の支部となった¹¹⁾。反戦同盟は各地に広がり、42年8月には、華北の反戦同盟 [と反戦団体] が延安で会議 [華北日本人反戦団体代表者大会] を開き、それまでの工作の結果を検討しあった。同時に日本兵士代表者大会が18の師団・旅団に属していた捕虜たちによって開かれた。大会の討論に基づいて228項の「日本兵士の要求書」がまとめられた。「これらの要求の多くは華北の普通の兵たちの差し迫った、個人的な関心事を反映している。」

この大会の後、日本人工作者の数は急速に増えていった。40年11月に延安に開設された日本労農学校およびその他の地域の類似の教育施設で訓練された心理作戦工作者の集団が生まれ、益々多くの仕事を日本人に任ずことが実際的となっていった。

43年春に岡野が延安に到着した [実際は40年¹²⁾]。彼の存在、能力、指導性は反戦同盟の工作と全体としての心理作戦を鼓舞した。反戦同盟の諸支部の活動はより関係を深め、同盟は八路軍のために活動する捕虜のグループから、独立した日本人の革命的組織の可能な中核となっていた。43年7月7日、岡野は『日本国民に告げる書¹³⁾』を発表し、日本国民は、彼ら自身のために、また彼らの国のために、現在の戦争に反対し、日本軍閥を打倒し、人民の民主的政府を樹立しなければならないと述べ、そのためには、国の内外、軍内の“広範な大衆”が団結し、合作せねばならないと訴えた。44年1月に華北・華中の反戦同盟支部の代表者の会議が開かれ、岡野の提案を討議し、反戦同盟の解散と日本人民解放連盟の結成を決議した。これは活動を日本軍に対する心理作戦から、在中国の日本人居留民、さらに日本本土の日本人への政治的アプローチを含むものに拡大することであった。

この新しい方針により、八路軍の心理作戦工作は強化されたが、より重要なことは、日本人が単なる八路軍の援助者としてではなく、日本のための積極的な方針を求めるより広い政治的基礎を工作に付与することによって、日本人としての情熱と鼓舞を発揮できるようになり、工作の効果が著しく挙げたことである。

岡野によれば、その後まもなく政治部は対日心理作戦の政策、決定、計画および実際の工作を解放連盟に委ねることを決定した。八路軍は連盟を支え、その工作をやりやすくした。しかし広い基本的な政策は共同で決定されている。実際的には連盟は独立した、全体として日本人の組織として機能している。李によれば、八路軍は、革命は輸出できない、それゆえに日本の政治綱領は日本人の領域のものであるという原則を保持している。

敵工部は解放連盟を支持し、供給し、支援している。そして連盟組織の工作に適さない地域での前線工作を実施している。連盟は直接の軍事的心理作戦を実行し、また日本本土への予備的な

工作も実施している。しかし敵工部はその対象を在中国日本軍に限定している。

この後に宣伝ビラの作成の方法と組織などについての簡単な説明があるが、この問題については後で詳しく取り上げるので、ここでは省略する。

(3) 八路軍による戦争捕虜の扱い¹⁴⁾

次にフィッシャーが最も関心をもった捕虜の取り扱いに関する八路軍の政策とその評価について見てみよう。

ここでもまず、八路軍の捕虜に対する態度とアプローチは政治的であると強調している。日本人捕虜は三つの点で役に立つと八路軍は見ている。第一に、日本人捕虜は心理作戦の潜在的な活動家あるいは媒体である。第二に、日本軍閥政府の打倒と民主的な人民政府樹立のための潜在的な手段である。だから彼らを射殺したり、監禁しておくことは戦争に役立つ貴重な資産を浪費することである。第三に、学習あるいは協力を拒む捕虜たちも利用できる。彼らを普通通りによく扱い、それから彼らの原隊に送り返す。その言動に関わらず、彼らは八路軍の宣伝の真実性を示す歩く証明書になる。

方 法

捕虜の友情を勝ち取り、進んで協力を得ることが必要である。第一段階は捕虜になった最初の接触から始まる。それにはまず八路軍の将兵の教育が必要である。将兵と農民、すべての人々にその理由が説明された。政治部は捕虜の扱いに関する詳細なマニュアルと指示を八路軍の全単位に配った。(そのコピーは後日翻訳して概要を提供できると思う。)

速 捕

日本軍を武装解除するまでは敵として扱うが、解除後は最善の扱いがなされる。私は延安で何人もの捕虜と話したが、彼らはみなよい扱いを受けたことを強調した。(以下具体例を挙げた説明が続くが省略)

初期の教育

捕虜になると直ぐにパンフレットが渡されて教育が始まる。敵工部の工作者が教育を含む捕虜に対する政策の実施を監督する。解放連盟員たちがこれを助ける。連盟員が十分いるところではこの工作の多くを彼らが引き受ける。常に人間的接触を日本人にさせるのが政策である。上述のパンフレットに加えて、他のパンフレットが捕虜に配られ、連盟とその綱領、目的などについて説明する。李によれば、最初の段階は捕虜の敵対感情を減らすよう努めることである。前線で八路軍兵士と農民によって友好的な態度が示される。後方に移されると直ぐに日本人、あるいは日本語のできる中国人と接触する。多くの捕虜たちはどうしてこのような思いもかけない扱いを受けるのか知りたいと思う。とくに捕虜を“教化する”ための特別な努力はしないが、彼の質問には答える。また八路軍はどうして日本兵を敵と考えていないか、高級士官と軍閥指導者のみを敵と見なしているかを示す。

捕虜の釈放

元の部隊に戻りたい捕虜は返していた。八路軍のこの政策には様々な理由と目的がある。第一

に、捕虜たちは八路軍の手中で拷問され、殺されると恐れていた。名誉ある客として扱われ、元の戦線に戻るのを助けられた捕虜たちは、これらの宣伝が偽りであるという生きた証拠になるであろう。第二に、無知と恐怖に基づいた日本兵たちの敵意をこの手段によって減らせることを望んだ。第三に、捕虜の釈放は八路軍とその兵士たちが普通の日本兵たちにとっての友好的で同情的な態度を示す手段であった。この方法で中国と日本の一般の人々の間の友愛というゴールに向かって寄与することを希望した。それは日中、朝鮮、台湾の人民の日本軍閥に対する人民戦線の理念の助けになるだろう。

最初、釈放された捕虜たちが彼らの原隊に戻って、反軍国主義的な細胞を作ること、日本本土における地下の反軍国主義工作にさえ導くことを期待した。しかし間もなくこれらの望みは実際的な可能性に基づいていないことが判った。

現在の政策は、彼らに2週間留まらせ、その間に特惠的な扱いをし、同時に彼らが受け入れうるような教育を与える。それでも彼らが日本軍の所に帰ることを求めるなら、彼らの送別会をし、贈り物を渡し、日本軍の声聞こえる距離までエスコートする。私はもし捕虜たちが前線で直ぐに釈放を要求する場合には、許されると聞いた。しかしそれは稀な場合のみではないかと思う。

ゲリラ戦の条件のもとではしばしば捕虜の面倒が見切れない時がある。岡野はある時捕虜たちの意思に反して釈放し、日本軍に返したことがあったと認めた。しかし別の時李と羅は否定した。

釈放された捕虜が軍事情報を敵に漏らす心配はないのかと聞いたが、重要な司令部には近づけないからその心配はないと言った。しかも日本軍将校たちは彼らを信用せず、恐れており、彼らの“情報”に重きをおいていない。

八路軍の情報と新しい捕虜たちの言によれば、日本軍に戻った兵たちは、よくて前線の普通の兵の生活を回復する。しかしかなりの数の兵たちが自殺に追い込まれ、また八路軍に自分の意志で投降する。多くの場合罰として異常な労役が課される。彼らはしばしば軍法会議にかけられ、投獄され、射殺されることもある。それでは送り返した目的が失敗したことにならないかと尋ねると、そうではないと、次のような説明がなされた。仮に彼らが直ちに逮捕されたとしても、彼らの前同僚たちが彼らを見て、八路軍は捕虜を殺し、虐待すると将校たちが言っていたことは嘘であることを知る。それは直ぐに部隊中に広がり、共通の知識になる。これだけでも価値がある。さらに彼を軍法会議にかけた将校たちも事実を知るであろう。仮に兵が他の単位に戻ったとしても、捕虜の衣食は十分で、なにも悪いことも無かったことが直ぐに兵たちに知られる。このことは次に戦闘に入り、とくに絶望的な状況に陥った時、兵たちに大きな影響を与える。彼らはより容易に降伏する。

ここ二、三年は以前よりも自らの意志で降伏する人達が増えており、最後まで戦うことは少なくなり、日本兵の戦闘精神は低下しているという¹⁵⁾。

八路軍当局は捕虜の釈放は二つの点で重要であると言っている。①我々の捕虜の扱いについての日本軍将校たちの嘘を兵たちに暴いており、同時に我々の捕虜を厚遇するという宣伝の正しさを証明している。②日本兵の側での敵対感情を減少させ、彼らに我々の宣伝を受け入れやすくし、それを拒否するのではなく、むしろ信じる傾向を作りだしてさえいる¹⁶⁾。

教育と工作の促進

八路軍に留まることを選んだ捕虜たちはさらに教育と学習の機会を与えられる。各辺区と多くの軍区に敵工部によって組織された“学校”に捕虜のグループがいると思われる。彼らは日本人

民解放連盟に加わっている。私はこれらの学校の組織、場所、教科などの明確なデータを集め損なった。しかしカリキュラムは延安の労農学校と大体似ていると推測する。

解放連盟員の大部分は6カ月の教育と学習の後、宣伝工作に従事している。その他に、日本軍の捕獲兵器の使い方を八路軍に教えたり、日本軍の戦術を八路軍の将校に講義したりしている。八路軍の単位の専門家として任命された者や、重要な八路軍の医療単位の外科医として働いている者もいる。八路軍の兵士と農民のために日本の演芸や歌を公演している単位もある。これらの捕虜たちの中国人たちとの広い接触によって、普通の日本兵は彼らと同じ農民か労働者であり、同じように日本軍国主義を打倒することに関心があるのだという考えを広げるのに役立っている。

フィッシャーは結びでこうコメントしている。八路軍の捕虜に対する態度とその扱いは確かに非正統的である、風変わりでさえある。驚いたことに、これらの“共産主義者”たちは、少なくともこの分野では、全く文字通り“汝の敵を愛せ”という新約聖書の教えに従っている。

(4) フィッシャーの結論と勧告

フィッシャーはこの外に、岡野らからビラの作成の仕方、日本国内の状況、日本共産党の政策などの説明を受け、関連資料の提供を受けた。

二週間の調査の結果、彼は八路軍と解放連盟の対日心理作戦を高く評価した。調査の結論として、先ず心理作戦成功の要因を5点挙げている¹⁷⁾。

- ①八路軍は対日戦の性質と目的についての明確な概念に基づいてその工作を基礎付けている。
- ②八路軍はこの線に沿ってその軍隊に敵に対する適切な態度を徹底的に、しみ込ませるように教育してきた。
- ③八路軍は対日心理作戦の殆ど全工作を、実際的となるや否や、ほとんど独立した日本人の組織、日本人民解放連盟で働く捕虜たちに引き渡した。
- ④八路軍は華北の日本軍の内部事情についての羨ましいほどの量の詳細な情報を所有している。直接的な情報報告とともに、大量の日本語の出版物や捕獲した文書などを恒常的に手に入れており、その中には日本軍の内部文書もある。
- ⑤八路軍のゲリラ戦術、日本軍が主に駐屯地とトーチカに常駐し、日本軍の間に傀儡中国軍が存在し、全戦線を通じて中国人農民たちが不断に往来していることは心理作戦の工作を非常に容易にしている。

次に情報の入手問題について、フィッシャーは、八路軍側が必要な情報を入手するのに全面的に協力してくれたことを評価した。彼らは十分かつ完全な情報を進んで提供したいと望んでいるように見えた。(岡野はある時、フィッシャーに、日本の各階層の状況を分析し、説明したが、その際情報源として、日本の新聞、雑誌、本、同盟ニュース、さらに八路軍の捕虜となった日本兵の尋問、および43年春に東京を立って延安に到着した日本共産党員 [岡田文吉] の情報などを挙げた。とくに最後の情報は、大陸から日本へ逆潜入する可能性を強めるものとして、OWIのみならず、関係諸機関の注目を集めた。¹⁸⁾)

彼らはなんらの見返りを要求することなしに、いかなる可能な協力も提供する希望を表明した。同時に、彼らはある戦線での援助、華北の彼らの領域からの共同作戦または並行作戦を歓迎すると表明した。華北の彼らの領域からの独立したアメリカの心理作戦 (PW) を行うことにも反対しないと信ずる。もっともこの点についての明確な約束は求めているが。

出版物や心理作戦の情報の定期的な提供については既に約束されており、重慶に送られるであ

ろう。延安に情報と翻訳のポストを維持することができれば、大いに効果的であろう。バレットもこのようなポストの設置に賛成している。八路軍の方でも我々がそうするよう論じている。

日本の中波放送を傍受する班が設置されれば有益であろう。

彼らの援助に対する見返りとして、八路軍の心理作戦機関にできるだけの援助を与えることを勧告する。当面は情報と物資の交換および重要でない装備品の供給に限定されねばならないであろう。装備品は、政治的理由のため、反国民党宣伝工作に直接適さないタイプのものでなければならないであろう。

最後に、八路軍の政策がアメリカの心理作戦と矛盾するか否かを見きわめるために、彼らの心理作戦の路線と政策について注意深い研究がなされるよう勧告する。もし矛盾しないのなら、華北における共同作戦の将来の設定を是非進めるべきである。それには先ず二つの形がありうる。1. 八路軍によって準備され、米軍によって印刷されたビラを、米軍機が日本軍の背後、八路軍、新四軍地域内に散布する。2. テストしてよければ、八路軍地域に中波放送ステーションを設立する。

しかし勿論、八路軍との心理作戦での積極的協力の問題はより高度な政策決定を待ち、それによらねばならないことを認識している、と結んでいる¹⁹⁾。

Ⅱ エマーソンとアリヨシの活動と報告

(1) エマーソンとアリヨシの訪延

フィッシャーが延安から重慶に戻って後、10月22日にエマーソンとアリヨシが延安に赴いた。エマーソンは戦前駐日アメリカ大使館に勤務した日本問題担当の外交官であるが、大戦中の43年、サーヴィスらとともにスティルウェル司令部付に任命された。サーヴィスは主に重慶に駐在したが、エマーソンはインド、ビルマでOWIと協力しながら対日心理作戦に従事した。その時アリヨシら日系二世のOWI組織と共に活動した。アリヨシはハワイ出身の日系二世で、戦前ハワイ大学、ジョージア大学で学び、種々の仕事に就いた後、沖仲仕となり、労働運動に参加した。大戦勃発後マンザナー強制収容所（Relocation Center）に収容されたが、軍役を志願し、44年3月陸軍軍曹として日系二世らのOWIチームを指揮してニューデリーに到着した。そこでエマーソンと出会った。このチームは、4月半ばエマーソンに引率されてアッサムのレドに行き、北ビルマ戦線の対日心理作戦を展開した。

6月エマーソンは初めて重慶を短期訪問した。この時鹿地亘と会い、また鹿地から延安の岡野らの活動を聞いた。その後インドに戻ったが、サーヴィス、フィッシャーの報告に接していた同じ司令部付のジョン・デーヴィスの勧めで、10月アリヨシを伴って重慶を再訪し、さらに延安に赴いた。同じ飛行機に、デーヴィスと『タイム』記者のホワイト（Theodore H. White）が乗り合わせた²⁰⁾。

エマーソンは12月17日まで延安に滞在したが、アリヨシは戦後まで留まった。45年春にはシェースドルフが加わり、アリヨシと協力した。

(2) 日本人捕虜の意見と態度

エマーソンらは毎日のように日本人捕虜たちと会い、しばしば彼らとの座談会に出席した。また彼らの意見を知る手段としてアンケート調査を行っている。その一例として、労農学校で11月15日に行われた捕虜たちの戦争と戦後の日本に対する態度に関するアンケートを見てみよう²¹⁾。

日本人捕虜の一般的態度 98名, 無記名, 秘密投票

I 前職業

1. 労働者 (鉱山, 運輸労働者を含む)	32
2. 農民, 漁民	31
3. 商人 (店主と店員)	19
4. 会社員	8
5. 雑 (3名の記入なしを含む)	8
	<hr/> 98

II 学歴

1. 小学校	80
2. 中学	14
3. 大学および専門学校	4
	<hr/> 98

III 捕虜になってからの期間

1. 1年以下	17
2. 1-2年	32
3. 2-3年	12
4. 3-4年	18
5. 4-5年	11
6. 5年以上	8
	<hr/> 98

IV 質問

1. シナ事変で, 日本は正しいか	はい 2 いいえ 96
2. 英米に対する大東亜戦争で, 日本は正しいか	はい 3 いいえ 92 回答なし 3
3. 日本は戦争に勝つだろうか	はい 2 いいえ 94 勝負がつかない 1 回答なし 1
4. もし日本が勝ったら, 日本に帰りたいか	はい 11 いいえ 86 回答なし 1
5. もし日本が負けたら, 日本に帰りたいか	はい 94 いいえ 3 回答なし 1
6. もし負けたら, 日本は民主的國家になると考えるか	はい 93 いいえ 4 回答なし 1

7. もし勝ったら, 日本は民主的國家になると考えるか	はい 7 いいえ 88 回答なし 3
8. 天皇は今の戦争に賛成したと思うか	はい 75 いいえ 17 回答なし 6
9. もし日本が負けたら, 天皇は統治を続けると思うか	はい 4 いいえ 93 回答なし 1
10. もし日本が負けたら, 天皇制は廃止されるべきだと考えるか	はい 94 いいえ 3 回答なし 1
11. 日本で誰が現在の戦争に最大の責任を負っているか	軍国主義者 82 大資本家 4 天皇 4 軍国主義者と資本家 2 大地主 2 回答なし 2 (計96, 原文のママ)
12. アメリカ軍が日本本土に上陸した時, 日本国民は強く抵抗すると思うか	はい 11 いいえ 77 ある程度抵抗するだろう 8 回答なし 2
13. 戦争をより速く終わらせるために八路軍を支援しようと思うか	はい 96 いいえ 2
14. 戦争をより速く終わらせるためにアメリカ軍を支援しようと思うか	はい 96 いいえ 2

この結果についてエマーソンは次のように分析している。

質問に対する回答の一致の度合いは彼らが受けた教化（indoctrination）の力を示している。98名中96名が中国に対する戦争で日本が悪いと信じており、戦争の終結を速めるために八路軍若しくはアメリカ軍のために働く意志を持っている。94名が日本は戦争に負けるだろうと信じており、その場合には母国に帰る用意がある。2名のみが中国に対する日本の主張が正しいとなお信じているが、英米に対する戦争の場合には6名（回答なしを含めれば）に増えている。勿論彼らの体験は中国に限られており、英語国民との戦争については余り教育を受けていない。

98名中94名が戦後天皇制の廃止に賛成している事実は、この概念でさえも徹底した教化によって破壊することが不可能ではないことを示している。しかしながら、17名が天皇は現在の戦争に賛成ではなかったと考えている。

アメリカ軍の日本上陸に対する大衆的な抵抗についての意見は分かれている。少なくとも19名が何らかの抵抗があると信じている。

彼らの学歴が低い事実が彼らを容易に教化し易くしている。しかしながら、私自身および他の人々の観察から、彼らの意見は真面目であると私は信じる。さらにこのアンケートは現在の彼らの本当の意見を表しており、平均的な日本兵の信念と態度は体系的な教化によって変化されうることの一つの証拠であると信じている。

翌45年1月にエマーソンは同じようなアンケート調査を行っている。それは新しく労農学校に來た捕虜たちの意見と態度を調査し、上述のアンケートと比較する意図を持って実施したと思われる。しかし参加者数は23名と少なく、しかも捕虜になってから1年以下が14名、2年以下が5名、3年以下、4年以下、6年以下、7年以下各1名で、上述のアンケートと比較しても、また今回の捕虜年数間の比較としても充分とは言えないであろう。ただ天皇に関する事項で、天皇はこの戦争に賛成したと思うか、という質問に、総数23名中、そう思わない8、そう思う14、回答なし1であるのに対して、1年以下の14名中では、そう思わない8、そう思う5、回答なし1であるということは、思想教育の段階の違いを反映していると言えるかもしれない²³⁾。

さらにまた、日本軍や日本国内の情報を得るためや特定の事件・問題に対する捕虜たちの意見を得るためにも座談会が開かれた。その一例として、比較的最近日本を離れた捕虜たちによる日本の国内状況に関する座談会の記録をまとめたアリヨシの『報告』から、紙数の関係のため討議された項目だけを紹介する。

「労農学校における戦争捕虜たちの座談会の討議」（報告日：1944年11月24日）²³⁾

参加者12名 職業：農民7、炭鉱夫1、労働者2、商人1、車夫1

日本出発年月 44年6月4名、同2月3、同1月1、43年3月2、同2月1、同12月1

出身県 福島5名、熊本2、長野2、新潟1、岩手1、不明1

項目：食料の配給、闇市、配給の効果、配給点数、住居、住宅不足、空襲予防措置、労働者の生活条件、労働者の賃金、労働者の徴用、朝鮮人労働者、戦争意識、農業地域の状況、農業地域の戦争感、中小企業者、政府の宣伝、太平洋戦線、在米日本人、サイパンでの死、生産、常磐炭鉱での朝鮮人の暴動、名古屋三菱飛行機からの徴用労働者の脱走、徴兵、アメリカ人捕虜、（アメリカの）宣伝

アリヨシは前文でこう書いている。この座談会の記録によれば、日本国内の状況は非常に悪い。しかしここに参加していない岡野らは、日本国内の士気はなお高い、それは軍部の宣伝が有効だからであると言っている。

(3) ビラの作成方法

対日心理作戦の実施には、前線での呼びかけや電話での対話など、さまざまな方法がとられたが、その重要な手段の一つに宣伝ビラ (leaflet) がある。ここでいう「ビラ」とは、ビラ、パンフレット、小型新聞を含む宣伝物をいう。アメリカ軍では日系二世が協力して、日本軍に対するビラを作成し、大量に散布した。しかし目立った効果はあまり見られなかった。これに対して八路軍のビラは成果を挙げているばかりか、ビラの作成を極めて重視し、日本人捕虜が組織的な努力を注いでいることを OWI 側は知り、注目した。

アリヨシらは八路軍のビラ政策を学び、それと共に積極的に米軍各戦線の対日ビラを延安に持ち込んで批評を仰いだ。

すでにフィッシャーが延安に滞在していた時、『よいビラをいかに書くか』²⁴⁾ という指針が彼に渡された。これは日本人民解放連盟宣伝委員会が心理作戦工作と新工作者の訓練の経験に基づいて書き上げた指針 (a Guide) と説明されている。しかしアリヨシは書いている。ビラの「批評は全般的に岡野の『よいビラをいかに書くか』に基づいている。」また「岡野氏のビラ執筆者たちへの 21 項目の指針は宣伝委員会のバイブルである。²⁵⁾」

この『指針』には、心理作戦の任務は敵の戦闘能力を弱めることによって軍事的勝利を速めることであるとして、ビラに関する 21 項目の具体的な注意がまとめられている。それらは、早急な結果を期待するな。捕虜たちから貪欲に情報を蒐集せよ、とくに新しく来た兵たちから学べ、彼らは最上の教師である。工作の対象である敵の実際の状況をよく調査せよ、彼らがどういう状況下でビラを受け取るのか、その心理、態度、教育水準などをビラを書く前によく考えよ。一人でビラを書くな、常に共同で書き、皆の意見と経験を利用せよ等、ビラを書く上での心構え、姿勢から、ビラの内容に関する注意にわたっている。例えば、具体的で、よく知られた事実を書くのが最上である。嘘は書いてはならない、一つの小さな嘘は 100 の良いビラの効果を台無しにしてしまう、敵の嘘に対して味方の嘘で答えてはならない、敵の嘘は敵の宣伝、声明を使って暴露せよ。また問題や敵の困難を指摘するだけでなく、その解決法を示すべきである。日本の差し迫った敗北も、一般の兵や人民には敗北を意味しないことを示さずに、彼らを説得することはできない。連合国の声明やニュースはそのまま再録せず、注釈や説明をつけるようにせよ、普通の敵兵はそのままで理解できない。量より質が重要、一枚のビラには一つの主題を、500 字を越えないビラが最上、700 字まではまだしも、1000 字を越えてはならない、漢字の使用は最小限にせよ。署名は内容に合ったものにすべきで、一般的には日本人個人または日本人組織の名が最善である。ビラや宣伝の結果を注意深く研究せよ、それが工作を改善する唯一の道である。組織的、継続的に心理作戦の専門家を訓練せよ。

それでは、延安では実際にビラの作成はどのように行われているのか。アリヨシはこう報告している²⁶⁾。

八路軍の日本軍民に対する全宣伝工作は現在連盟に委ねられている。華北・華中の 3 地方協議会と 17 支部の神経中枢は労農学校の 20 人²⁷⁾ の学生からなる宣伝委員会である。この委員会が政策を決定し、計画を練り上げ、各支部の宣伝工作を検討し、指示を出し、ビラを作成する。それは無線で支部に送られる。またビラの書き手を訓練する。

宣伝委員会は 3 班に分かれている。1. ビラ書き班、2. 翻訳班 (中国語を日本語に)、3. ローマ字班 (日本語のテキストをローマ字に直し、前線支部に電送するためタイプで打つ)。

宣伝委員会の核心は 5 人中央委員会 (the Five Men Central Committee) であり、実際に政策を

決定する（岡野の承認を条件として）。同委員会は一定期間の計画を作成し、作成されるビラのタイプと種類を計画する。

宣伝委員会の会議で中央委員会はそれぞれのビラを書く人を指名し、締切り日を指定する。宣伝委員会がビラに入れる主要点を決定した後、ビラ書き班のメンバーたちがテキストを書き出す。

ビラが書かれるとそれを中央委員会に提出し、同委員会はテキストを添削し、批評し、書き手に戻す。そこで書き直され、また委員会に提出する。こうした作業が3乃至5回、平均3回行われる。

書き手がテキストの修正に応ずる能力がないと、仕事は他のメンバーに割当られる。

中央委員会で承認されると、ビラのテキストは岡野に提出される。彼は批評し、提案し、時には中央委員会に全面的に書き直しを通告する。

テキストが完成すると、日本語のテキストをローマ字に直し、タイプで打ったコピーが無線ステーションに送られ、連盟各支部に発信される。

なぜビラを書き直すのか。 1. できるだけ最上のビラを作るためである。岡野は言う。「一枚のよいビラは十枚の平凡なビラよりもはるかに効果的である。質が量よりもずっと重要である。完全なビラというものはない。」 2. ビラの書き手を訓練するためである。相互の援助と批判は書き手を訓練するうえで非常に有益であるし、書き直しによってのみ効果的なビラを書くことを学ぶことができる。

定期的なビラの検討 4週間から6週間に一度、宣伝委員会はその時期に作成されたビラからいくつかを選んで研究する。批判は全般的に岡野の『指針』に基づいて行われる。主要点が強調されているか、どうかなど内容の検討とともに、タイトルの付け方に特に注意が払われる。

ビラはまた労農学校の学生たちの間に回覧され、学生たちは意見、印象を書く。

ビラの情報源と他の宣伝材料 宣伝委員会の中に日本問題研究委員会がある。5人の中央委員と少数の経験のある学生（労農学校の卒業生）が調査委員会を構成する。その主な任務はビラの手書きに材料を提供することである。その材料となるのは：

1. 日本占領地域にいるエージェントが八路軍のために買った新聞、雑誌
2. 捕虜の尋問（岡野はこれが最上の情報源と評価している）
3. 労農学校の学生たちの座談会の議事録。議事録から具体的な事実が得られない時には後で書き手が発言者にインタビューする。
4. 岡野の2週間に一度の労農学校学生に対する時事問題の講義
5. 延安発行の新聞
6. 地方（延安）で行われるイベント
7. 兵士の要求書

この大がかりで、組織的なビラ制作体制はアリヨシたちにとっては大変な驚きであったろう。最前線のレドと八路軍の本拠地延安とでは比較しがたいが、参考のためエマーソン、アリヨシのチームの体制を、その一員だったカール・ヨネダ（Karl Yoneda）の1944年4月の『日記』から引用しておこう。「エマーソンの指揮下に、私が伝単〔ビラ〕起草者、安井がラジオ放送、有吉と川上が英文翻訳係、佐々木と依地が訪問官、阿久根と橋田が押収文書の整理係、石井が挿絵担当という体制が整った。²⁸⁾」

さて、結論として、アリヨシは大要こう書いている。

八路軍は長い経験を経て、敵に対する効果的な宣伝は日本人によってのみなされうることを発見した。

日本兵は日本人によって送られた宣伝をより受け入れやすいことを示している。

日本人の心理、言語、習慣等を知ることがピラの書き手と心理作戦工作者全員の前提条件である。この知識なしに対日心理作戦は成功しえない。それゆえ捕虜となった日本兵は最上のピラの書き手である。しかししばしば最良の調査工作者というわけではない。

連盟は、教化期間終了後捕虜たちは左翼的角度から難解なピラを書く傾向があることを発見した。これには教育が大きく関係しているし、連盟の幹部たちを喜ばせたいという捕虜たちの願望がある。だから捕虜たちによって作成されたピラはチェックされねばならない。

最上のピラは多数の人の心の作品である。委員会はピラを3～7回も書き直す。書き手は批判を受け入れ、彼らの仕事を改善するよう教育されてきた。委員会はこれが最善の教育方法であり、よいピラを制作する唯一の方法であることを発見した。

古いピラを定期的に研究することもピラの書き手たちの仕事を改善するために必要である。この点において連盟は容赦ない。最も有効なピラを制作するには、心の広さと批判を受け入れる態度が必須であると見ている。書き手たちには、農民たちが大きな危険を冒してピラを敵の手に配っていることを常々思い起こさせる²⁹⁾。

(4) アメリカ軍のピラの批評

前述したように、アリヨシたちはアメリカ軍が南太平洋、レド (POWAI)、ハワイ、重慶など各地で作成したピラを延安に持ち込み、日本軍捕虜たちの批判を求めた。これに対する解放連盟側の対応も徹底したものであった。宣伝委員会は、労農学校の学生たちを学歴、文化的背景、捕虜の期間、再教育と改造の程度などの見地から分けた班毎にピラを回して批評させ、その結果を宣伝委員会がまとめ、さらに委員会の批評と提案を付け加えた。全体で100人の学生が批評に参加し、非常に多くの時間をこの仕事に割いたのであった。しかし批評は厳しく、アリヨシは「批評は率直かつ時には無遠慮である」とか、「見ての通り、批評のあるものは全く荒っぽい」などといささか辟易した様子も伺える³⁰⁾。しかし全体的にアリヨシらは極めて真剣に批判を受け止め、アメリカ軍のピラを改善する参考にしようと努力した。

解放連盟側のアメリカのピラに対する基本的な批判点は、『ホノルルのピラに対する批評』³¹⁾の次のような意見に代表されるであろう。

これらの「ピラはみなアメリカの軍事力を強調し、日本人には戦争に勝つチャンスがないからというだけで、日本人に戦闘をやめるよう語っている。他方、もっとも強調し、説明する必要がある宣伝上の重要点が事実上無視されている。つまり、a.これは不正義の戦争である。日本軍閥と資本家は自分たちの利益のために日本人民を犠牲にしている。日本が戦闘をやめれば、すぐに日本人民は再び幸福を享受することができる。b.アメリカの戦争目的は日本軍閥の除去であり、日本の植民地化ではない。」

これらの問題に集中し、あらゆる手段を使ってこのメッセージを日本人民に伝えることが重要である、と指摘している。

『延安報告』には色々な地域のピラに対する批評や座談会の記録が収められているが、ここでは紙数の関係から岡野のポワイ (レド)、重慶、南太平洋のピラに対する「概括的な批評」³²⁾の中心部分を紹介する。

①アメリカのビラは目前の戦術的なビラが多く、アメリカの戦争目的、戦争の原因、戦後の日本などを取り上げた長期的、戦略的なものが欠けている。

②アメリカは日本軍民に、日本が負けており、結局敗北すると絶えず思い起こさせている。これは逆効果を与える。彼らに出口を示さずに、敗北していることだけを言いつづけるならば、軍国主義者の宣伝を助ける効果を生むであろう。この数カ月戦争は急速に動いており、日本兵たちでさえ日本の勝利を疑うようになっている。敗戦は軍国主義体制の崩壊と日本国民の解放を意味することを日本国民に示すという次の局面に早急に入らなければならない。

③アメリカのビラの多くは難しすぎる。言葉、スタイル、内容が小中学卒業生には高度過ぎる。古歌や文学的慣用句を使った南太平洋のビラは一般の日本兵の理解の程度を超えている。

④アメリカのビラはもともと日本語で書かれたものより、英語を翻訳したのが多いように見受けられる。翻訳者が原文に忠実で、改変を躊躇しているため、文体や表現が日本語的でない。

⑤ビラの多くは戦闘地域の軍隊のためには長すぎる。若干のポワイの最近のビラは短くて、適当である。

⑥ビラは何度も練り直していない印象を受ける。量より質が重要である。

⑦ビラの多くは主題が一般的すぎる。もっと事実的な材料、詳細な図、イラストレーションなどを使うべきである。捕虜の尋問記録、日本の新聞、雑誌、同盟のニュースなどは有効な材料である。

ポワイの『戦陣ニュース』は戦闘地域のビラとしては最もよい。ニュースの選択、地図の使用、制限された地名の使用、小さなサイズと広い空白部分など。

重慶と南太平洋の新聞は日本兵の水準では高質過ぎて、博学をひけらかしたいと欲しているような印象を受ける。兵士たちの無知を暴露することによって彼らを敵にまわすようなことはすべきでない。

われわれの新聞は日本の『読売報知』や『朝日』のようなトーンで書くべきではない。われわれは敵であり、われわれの新聞は敵の宣伝と見なされている。われわれのトーンはソフトで、説得力のあるものにし、強硬で、理屈っぽいものにすべきではない。

また岡野は四銭、五銭をもじったポワイのビラを批判しているが、このビラは前出の日系二世の共産党活動家ヨネダが書いたものである。

ヨネダはこう書いている。「死線（四銭）を越えて誤線（五銭）となり、苦戦（九銭）を越えて実戦（十銭）どころか敗戦つづき」という絵入りのビラを2万枚以上印刷、編集部も『上出来だ』とOKした。ところが[日本兵]捕虜『五人組』の反応を得ることを忘れた。彼ら曰く、『五銭や十銭銅貨は千人針と同じく災難よけ、または命拾いのお守りで神聖なものである。これを皮肉ることは日本兵を侮辱することである。宣伝の効き目はあべこべになる』という。あわててこの旨を本部に報告し散布を中止した。日本兵と米軍兵の考え方に大きな食い違いがあることを勉強したわけだ。³³⁾』

岡野の方は、このビラは混乱していると批判し、これは言葉の遊びではあるが、誤り（五）を犯すと死（四）が来るということだと甚だ「論理的」な批評をしている。

それでは八路軍側のビラの観点と内容はどうか。解放連盟宣伝部は延安と前線で作成されているビラについてこう分類・整理している³⁴⁾。

I 延安で作成されたピラ

1. 時事に関するピラ。東西両戦線や日本の国内問題など。現在これが主要である。例えばフィリピン戦の意味とその将来。
2. 解放連盟に関するもの。綱領と政策の説明。日本が敗北しても植民地にならないし、新しい民主的な国になるべき。
3. 連合国に関するもの。連合国の軍事的、政治的、経済的条件を説明する。カイロ会談、アメリカの戦争目的、八路軍の捕虜政策など。
4. 延安および日本労農学校に関するもの。労農学校で与えられる教育、学生你的生活、元日本兵と住民との交流。米軍事視察団の歓迎会。
5. 延安から前線への連絡・通信は困難である。それゆえ延安で作られるピラはよく時間について考えねばならない。

II 前線で作成されたピラ

1. 前線で撒かれたピラの多くは、地域の条件に従って作られている。とくに兵士や住民の生活条件を調査した後に作られる。
2. 問題が起これば速やかに把握し、兵士や住民に答えを与えながら書かれる。
3. 全般的に兵士や住民の上官に対する反抗を引き起こすことを意図している。
4. 各季節に適合するピラを作ってきた。たとえば桜の季節には、桜に関してのピラが作られる。暑い季節には、天候が健康にどう影響しているかを尋ねる気持ちで作られる。年末には、年賀カードが送られる。主に日本軍兵士の心にノスタルジアと戦争に倦んだ気持ちを起こさせることを意図している。
5. 八路軍、新四軍の行動に相応して書かれる。
6. 延安から電信で送られてきたピラは、各地の条件に応じて注意深く選択される。しばしば使われないままになる。
7. 退屈でないピラにするために、内容、スタイル、色彩など様々な角度から考察する。

III エマーソン、アリヨシの意見と提案

(1) アリヨシの提案

エマーソンもアリヨシも八路軍、解放連盟の心理作戦、とくに捕虜に対する政策は成功していると評価した。またピラの作成についても大いに学ぶところがあった。レドではヤスイ (Kenji Yasui) がアリヨシの後を引き継いで、班を指揮していたが、アリヨシは八路軍の捕虜政策の調査から、レドのヤスイたちにも役立つであろうとして意見と提案を送っている (11月29日付)³⁵⁾。

「延安では捕虜の扱いと教化に際して、友愛 (fraternization) が大いに強調されている。それは、八路軍が華北・華中の日本軍民に対するすべての宣伝工作に捕虜を使うことに関して明確な政策を持っているからである。日本人捕虜が八路軍のイデオロギーで再教育され、教化されると、直ぐに彼らは八路軍にとって役立つようになる。親切な扱いと友情は意気阻喪し、精神的に打ち砕かれた日本人捕虜の心に深く入り込む。」解放連盟を破壊するために八路軍に送り込まれたスパイたちでさえも味方に引き込まれ、連盟員たちの同志愛によって再教育が可能になった。労農学校で解放連盟の古いメンバーたちは健康的で健全な雰囲気を作り、新しい捕虜たちはよく扱われ、大事にされ、彼らは新しい環境に慣れ、適応するようになった。

レドでも、「よい扱いと友好的な態度によって捕虜たちを引きつけよ、そうすれば彼らは我々の

宣伝をより受け入れやすくなる。捕虜たちに将来への希望を与えよ。彼らに戦後日本に帰ることができることを確信させよ。この希望を彼らに与えることで彼らをよりよい心理作戦工作者にするであろう。単により扱いに感謝してわれわれのために工作をする人々の成果と、軍事体制崩壊後に日本に帰りたいがゆえに工作をしたいと真剣に願う人々の成果との間には顕著な違いがある。」

ついで、世界情勢をもっと取り上げ、諸事件が捕虜を含む日本人に何を意味するのかを適時説明し、日本の敗北は軍部独裁の倒壊と民主日本の誕生を意味し、我々には日本国民を奴隷化する意図はなく、彼らを敵と見なしていないことを捕虜たちに話すべきだとしている。

また延安で、レドの捕虜の写真に目隠しをしたピラとピラの署名者の問題について話し合った経験を紹介している。延安の捕虜たちは目隠しの写真を見て、彼は意気消沈し、不健全な雰囲気を与え、幸福ではない印象を与えると目隠しに反対の意見が多い。

また八路軍の捕虜たちはピラに彼らの名前を署名する。一般には捕虜になってからの変名で。しかしある地域では進んで実名を使用してより効果を挙げている。実名あるいは変名で署名したピラは日本軍に遙かによく訴え、より有効であると彼らはいふ。これらの問題を検討してみたらどうか。

労農学校では最近フィッシャーが送った120枚の写真で、写真展を行い、大きな関心呼んだ。彼らは写真は非常に教育的で、暴露的であると言う。レドでも定期的に行ったらどうか。写真を主題ごとにグループ分けし、日本語でキャプションを書き、展示する。

友愛は日本軍に対する心理戦争に有効であることを証明している。日本軍が一度我々が残虐ではなく、同情的、友好的でさえあることを悟ると我々の宣伝をより受け入れ易くなる。岡野は年賀状や他の祝祭日のカードを送ったらと提案した。

そして最後に、「私はここへ来てから多くのことを学んだ。広い基礎に立ってなされた解放連盟の工作を見て、私は日本国民と軍隊に対する心理戦争に新たな自信を与えられた」と述べた後、ヨネダを延安にしばらく送ってはどうかと書いている。「彼なら私が得ることができた以上に多くのものを得ることができるであろう。」そしてさらに、彼の後にヤスイとその他の人達を送ることができれば理想的であろうと結んでいる。

(2) エマーソンの報告と提案

エマーソンも11月10日の報告で、「八路軍の日本人捕虜に対する政策は成功している」³⁶⁾と書いている。そして次のように言う。延安の大多数の捕虜たちは実際に改造されていることは疑いない。彼らは心から反戦・反軍国主義を確信し、日本軍隊に反対して活動しようとしており、帰国して新しい、再建された日本で再び生活を始めることを望んでいる。彼らが受ける教化の多くは共産主義的な性質のものであるが、彼らに共産主義者になるよう特別な圧力はかけられていない。延安の学校の学生の約4分の1（27名）が共産主義者同盟に属している。

八路軍のこのような成功を説明する要因として五つを挙げ、それぞれに説明が付けられているが、紙数の関係とすでに指摘されている事実が少なくないので、説明部分は⑤を除いて省略する。

- ①捕虜に対する八路軍の政策は親切で思いやりのある扱いを基礎にしている。
- ②八路軍の捕虜政策は中国人将校・兵および中国の民間人によって理解され、支持されている。
- ③日本人捕虜は逮捕の瞬間から巧みに、思いやりをもって遇されている。
- ④八路軍の日本人捕虜の教化方法は成功している。

⑤華北・華中で行われている戦争のタイプはとくに対敵宣伝活動に有利である。

ゲリラ戦術と軍事情勢の流動性は浸透を許し、詳しい情報の獲得、および長期間連続した宣伝の武器の使用を可能にしている。捕虜の宣伝班はしばしば作戦地域に駐屯している日本軍の将校・兵についての姓名、階級、個人データまで知っている。

中国農民はビラ、メッセージ、慰問袋、贈り物などを持って前線を往来している。

華北・華中の状況は米軍が日本人捕虜を捕らえる地域の状況と異なっている。八路軍の日本人捕虜の成功した扱いに貢献した利点は米軍サイドには存在していない。戦争の性質と中国共産党の政治的イデオロギーはこれらの利点に含まれる。それでも、捕虜たちは自由意志で喜んで彼らの以前の同僚たちに対する前線での危険な宣伝活動に従事するまでに教化されている。

しかしこのような経験は八路軍だけにユニークなわけではないとして、他の地域の捕虜政策と捕虜の活動について触れている。

鹿地巨氏は39年に桂林で宣伝工作のために捕虜たちを訓練しはじめた。2カ月後、39年12月26日、彼は12名の捕虜を前線に連れていった。彼らはラウドスピーカー、電話を使い、またビラを書き、それを日本人に配布した。彼は後に反戦同盟を組織し、中央政府の賛助のもとにこの活動を断続的に実行した。

ビルマでは捕虜を教化する組織的な試みはされて来なかったけれども、保護とよい扱いを受けた多くの心が自動的に変化したことを経験が示してきた。ある日本軍少尉はアッサムのレドの収容所にいる少数の選ばれたグループを現在指導しているが、ビラを準備したり、OWIの心理作戦チームのための宣伝に助言をしている。

デリーでは、イギリス軍は6,7人の捕虜のグループを選んだ。彼らは捕虜担当将校の指示のもとで、英軍とOSS(米戦略諜報局)のための宣伝を作るのに進んで活動している。これらの捕虜たちはなんら教化を受けていないが、確信をもって反戦であることを自ら宣言した。付け加えておくと、米当局のために宣伝活動を補助する捕虜のケースについて、戦域法務官主任は、一定の制約のもとで、これらの活動はジュネーブ協定に違反するものではないという意見を表明した。

インド、ビルマ、中国の経験は、多くの捕虜が彼らの態度を変化させることを証明している。多くの人は教化を受け入れやすい。それ故、世界の他の部分でアメリカの手中にある選択された捕虜のグループに同様のプロジェクトを成功裏に実施することは不可能ではないと思われる。必要なのは、有能な人材、日本人の方がよい、注意深い調査と非協力分子の迅速な隔離、親切で理解ある扱い、およびよく計画された教育プログラムである。人材については十分信頼できる改造された日本人捕虜を中国、ビルマ地域から連れてきて、アメリカのキャンプで捕虜を訓練することに使うことを提案する。

改造された日本人のグループは宣伝の目的のためのみならず、日本の平定と戦後日本の処理において我々の責任に含まれるより重要な任務のためにも有用であろう。

エマーソンは、同じ頃(11月7日)延安で、岡野と解放連盟の活動の短期の研究から、「彼らの経験と成果を対日戦の遂行を有利にするために利用できる」と確信したと前置きして、四つの提案を述べた『覚書』を書いている。①国際的な“自由日本”運動の組織を作る。②日本国内に地下組織を作るよう働きかける。③日本、朝鮮、満州に放送するためのラジオ・ステーションを山東の共産党地域に設置する。④日本平定と占領期に米軍政要員と協力する日本人を訓練する³⁷⁾。

彼は12月に延安を離れ、翌45年1月延安を短期再訪した後、2月に彼の構想をもってワシントンに出発した。

注

- 1) 70通の『延安報告』のうち、数通の朝鮮人の状況、朝鮮独立同盟などの報告、および1通の鹿地亘研究室(重慶)での座談会の記録などを除くと、その殆どが八路軍の対日心理作戦関係(岡野の日本共産党関係の発言を含む)のものである。今回は朝鮮関係、日本共産党関係の報告は取り上げない。他方、『延安報告』には当時OWI要員たちが延安から送った全報告が収められているとも言えない。例えば、エマーソンが朝鮮人の指導者とインタビューした報告は重慶の大使館の火事で消失したという(筆者とのインタビュー、1974年6月20日、スタンフォード)が、それは『報告』にも収められていない。また本稿の最後で取り上げているエマーソンの覚書(注35)も『報告』にはない。さらにアリヨシらは45年4月以降も延安にいて報告を送っているが、『報告』は時期的には、岡野進の鈴木内閣に関する分析の報告(No. 66, April 12, 1945)で終わっている。ちなみに、No.70は、日本人民解放連盟宣伝部「在華日本人居留民に対する我々の政策草案」(1944年3月20日)の英訳である。
この『延安報告』は、1975年にFederal Record Center, Suitland, MD. に収められていたRG208 OWI Chinaのファイルから採った。70通の『報告』の中から48通を選んで、コピーをとったが、残念ながら採らなかった『報告』のリストが今見つからない。なお、この『延安報告』は、ジョン・S・サーヴィスの『延安報告』とは別のものであることを付け加えておく。
- 2) 後述(注36)のエマーソンの『報告』(No.21)によれば、1938年から43年12月までに、捕虜になった者2407名、内2085名が釈放された。香川孝志・前田光繁『八路軍の日本兵たち』(サイマル出版会、1984年)、58頁にも同じ数字が挙がっている。シュースドルフの『報告』には、44年5月までの捕虜総数は2522名、うち自主投降者115名、44年12月現在の捕虜数は609名、うち日本人民解放連盟員は428名、45年3月18日現在、延安の日本労農学校の学生は147名、また延安に居住する捕虜は44年12月、125名、うち解放連盟員111名、45年4月、169名、うち解放連盟員132名、という数字が挙がっている。No. 59. Adie Suehsdorf, "Statistics on Japanese POWs Taken by the 8th Route Army." (March 27, 1945) さらにまたエマーソンは現在(44年11月)華北・華中に推計450名の解放連盟員が活動していると書いている。後述(注37)の『エマーソン覚書』
- 3) 香川・前田『前掲書』にはこう書かれている。「『階級的立場に立った捕虜教育は、アメリカ軍にはできないだろう』とわれわれは心のなかでは思っていた。」(香川)、99頁。彼らは「日本人捕虜教育の経験の吸収につとめたが、アメリカ軍の本質からいってそれを生かすことはできなかった。」(前田)同、177-178頁
- 4) 「日本人民解放連盟綱領草案」(44年4月)は『野坂参三選集・戦時編』(新日本出版社、1967年)365-371頁にある。
- 5) 岡野の演説はサーヴィスの44年8月18日の報告による。Subcommittee to Investigate the Administration of the Internal Security Act and Other Internal Security Laws of the Committee on the Judiciary, U. S. Senate, *The Amerasia Papers: A Clue to the Catastrophe of China*. 2 vols. (GPO, Washington, D. C., 1970), pp. 761-764.
- 6) *Ibid.* p. 762. この歓迎会の演芸プログラムのコピーがバレットの『回想録』の93頁に採録されている。それによると、最後に話劇『島田上等兵』が上演された。彼は劇の終わりで、日本兵たちが日章旗を踏みつけにしたのを見て驚いたことを記している。David D. Barrett, *Dixie Mission: The United States Army Observer Group in Yen-an, 1944*. (University of California, Berkeley, 1970) p. 52.
- 7) E. J. Kahn, Jr., *The China Hands*. (The Viking Press, New York, 1972) p. 164.
- 8) Yen-an Report No. 1 (F.M.Fisher), "Yen-an Trip - General." (Sept. 25, 1944) 以下, "Yen-an Report" を省略し, No. から記す。
- 9) No. 2. (F. M. Fisher), "Development of the Eighth Route Army's Psychological Warfare against the Japanese." (Sept. 25, 1944) この報告では、しばしば、譚政「論敵軍工作的目的與方針」(『八路軍軍政雑誌』1-9, 1939年9月25日)を引用、及び参考として言及している。その英訳は、No. 3. "On the Aim and General Direction of Work against Enemy Troops by T'ang Cheng."
- 10) 中国語文は、孫金科『日本人民的反戦闘争』(北京出版社、1996年)34-35頁にあるが、これは鹿地亘編『反戦資料』(同成社、1964年)292頁の日本語訳から採っている。『史沫德莱文集』第3巻(新華出版、1985)421-422頁、にもあるが、これは英文からの訳である。本稿では『報告』(英文)から訳した。但し本文中の()内は日本語文にはあるが、英文『報告』には欠けている。
- 11) 当事者の回想である香川・前田『前掲書』では、覚醒連盟は1942年8月になって反戦同盟と合体したとなっている。179頁
- 12) 野坂は40年3月、モスクワから延安に到着した。彼の到着と滞在は秘密にされ、林哲と名乗った。43年5月、コミンテルンが解散した後、5月31日の『解放日報』は岡野が最近延安に来たと述べ、以後公然化し

- た。同年11月8日、重慶駐在の中国共産党事務所員がアメリカ大使館を訪ね、岡野の「日本国民に告げる書」(『解放日報』43年7月7日、注13を参照)を渡し、その際岡野は36年にソ連から日本に帰り、42年ひそかに華北に渡り、3、4カ月前に延安に到着したと述べた。山極「アメリカの見た延安の岡野」(『アジア時報』、1976年5月号)1978年、サーヴィスにこの話をしたら、全く記憶にないということだった。
- 13) 前掲『野坂参三選集・戦時編』389-416頁にある「なぜ戦争に反対したか」がそれであろう。
 - 14) No. 11. "Treatment of Prisoners of War by the Eighth Route Army." (anon, n. d.)
 - 15) エマーソンは今や捕虜の30%が自主投降であると書いている。(No. 21. Nov. 10, 44)
 - 16) エマーソンによれば、捕虜を帰す政策は44年1月以来停止されたという。(No. 21.) しかしフィッシャーはそれを44年5月と書いている。*The Amerasia Papers*, p. 1397.
 - 17) No. 1 (Sept. 25, 44) .
 - 18) No. ? (コピーの判読不能). (F. M. Fisher), "Outline Analysis of PW Targets in Japan." (n. d.)
 例えば、軍事視察団員でOSSのステル大尉 (Captain Charles C. Stelle) は、日本共産党員のエージェントを日本本土に送り込んで、情報を獲得する計画を提案している。
 C. C. Stell to Commanding Officer, U. S. Army Observer Section, Sept. 21, 1944, "Plan for OSS Intelligence Operations under U.S. Army Observer Section." *Dixie Mission Manuscript History*, vol. I .
 - 19) No. 1.
 - 20) この間の経過については、アリヨシと行動を共にしたヨネダの『日記』が参考になる。カール・ヨネダ『アメリカ情報兵士の日記』(PMC出版、1989年)63-65頁。しかし前線でメモとして書いたものを、後に書き足して纏めたものなので、間違いや思い違いもある。例えば、44年6月1日の項に、エマーソンがアリヨシと軍の命令を受けて延安に飛び立った、と書かれているが、この時期は中国政府との了解が未成立で、軍事視察団も延安に派遣されていない。但し6月17日にエマーソンは重慶に行っている。もしそのことを指すとすると、エマーソンは書いていないが、アリヨシと二人で行ったことになろう。John K. Emmerson, *The Japanese Thread*. (Holt, Reinhart and Winston, New York, 1978) pp. 178-181. 邦訳、宮地健次郎訳『嵐の中の外交官』(朝日新聞社、1979年)138-142頁。また前述のインタビューで、エマーソンは、「サーヴィスが日本問題をもっと詳しく調査する人物の延安訪問を勧告し、それを受けてデーヴィスが私に勧めた。・・・アリヨシの同行を勧めたのは、私で、日系の人が行けばいっそう有効だと考えた」と語っている。(前出、インタビュー、74年6月20日)
 - 21) No. 22. J.K. Emmerson, "Poll of Japanese Prisoners on General Attitudes." (Nov. 25, 1944)
 - 22) No. 54. k.Ariyoshi, "Secret Poll on Prisoner Thinking." このアンケートは労農学校でエマーソンによって行われたと、アリヨシは書いている。しかし日付は45年1月13日となっている。エマーソンの『回想』によれば、彼は1月10日に延安を再訪し、12日に重慶に戻っている。op. cit. pp. 209-210. 邦訳、173-174頁。今は疑問のままにしておく。
 - 23) No.24. K. Ariyoshi, "Round Table Discussion by POW's at the Peasant and Workers School." (Nov. 24, 1944)
 - 24) No.5. "How to Write Good Leaflets" (Sept. 25, 1944)
 - 25) No.12. K.Ariyoshi, "Mechanics of Propaganda." (Nov. 7, 1944)
 - 26) No. 12.
 - 27) この『報告』では20名であるが、前掲(注9)No.2)のフィッシャー『報告』では18名となっている。
 - 28) ヨネダ『前掲書』65頁。なお彼らの姓名と簡単な紹介は同書44頁をみよ。
 - 29) No. 12.
 - 30) No. 42. K. Ariyoshi, "Review of POWAI Anti-Japanese Leaflets." (January 24, 1945) and No.56. A.Suehsdorf & K.Ariyoshi, "Yenan Criticism of Honolulu Leaflets." (April 3, 1945)
 - 31) No. 56.
 - 32) No. 17. K.Ariyoshi, "General Criticisms on American Leaflets by Okano." (Nov. 9, 1944)
 - 33) ヨネダ『前掲書』, 108頁
 - 34) No. 68. "Leaflets Produced in Yenan and on the Battle Fronts with Two Appendices." (Dec. 3, 1944) 本文のコピーが不鮮明なので、この『報告』の "Summary" (June, 1945) を主に、本文を部分的に使用して、この部分を書いた。
 - 35) No. 55. K.Ariyoshi, "Prisoner Treatment, Yenan, China, November 29, 1944." 前掲『アメラシア文書』にも採録されている。*The Amerasia Papers*, vol. II, pp. 1398-1400.
 ヨネダらの延安行きは実現しなかった。ヨネダは45年6月に昆明に移った。
 - 36) No. 21. J. K. Emmerson, "The Policy of the 8th Route Army toward Japanese Prisoners." (Nov. 10, 1944)
 - 37) Emmerson Reports-4. J.K.Emmerson, "Proposed Projects against Japan." (Nov. 7, 1944) RG 226 OSS 125290, National Archives.